

第2章

三年次報告

1. 一年生

- ①オリエンテーション・G-Mission
- ②STEPゼミ 1) P 2) S 3) E 4) T
- ③GE ④講演会・特別授業
- ⑤Field Work (フィールドワーク) 等

2. 二年生

- ①STEPゼミ 1) P 2) S 3) E 4) T
- ②SP ③GE

3. 三年生

4. 国際シンポジウム

5. 3月国内外のフィールドワーク

1. 一年生

①オリエンテーション (G-Mission)

【意義・ねらい】

- ・総合的な学習の時間の雰囲気を感じ取る。
- ・グローバルコース生としての自覚を持たせる。
- ・パソコンの使用や著作権など、今後活動する上で注意すべき事を覚える。
- ・明確な正答が存在しない問いに取り組む姿勢を身につける。

『議論をする上での五箇条』『講演を聴く上での五箇条』を考えて発表し、投票の後一つに絞るという作業を行った。ブレインストーミングの手法で発散と収束を行いながら、班の意見として一つにまとめるという作業を行った。

【授業の流れ】

1回目	情報収集の方法やPCを利用していく上での注意 総合的な学習の時間の進め方について
2回目	一枚の写真を見てその写真の分析を班員で議論し、二百字の文章に仕上げる
3回目	各班でまとめた案の一覧を見て重複する項目を整理する
4回目	各班で議論・講演の五箇条をまとめていく
5回目	各班による五箇条のプレゼンテーションと投票・オリエンテーションの総括

【生徒作品・成果物】

議
論

一、一、一、一、一、
、、、、、
楽、リ、自、相、積、す
し、一、分、手、極、る
む、ダ、の、の、的、上
、一、意、見、に、で、
、一、見、見、に、の、
、一、を、を、加、ル、
、一、ま、を、理、す、
、一、と、解、し、
、一、め、し、
、一、お、
、一、く、
、一、す、
、一、る、

講
演

一、一、一、一、一、
、、、、、
ト、要、メ、礼、本、聞
イ、旨、モ、儀、当、く
レ、を、を、正、に、上
を、つ、主、し、正、で
済、か、体、く、し、の
ま、む、と、熱、い、ル
せ、し、し、心、こ、
腹、な、い、に、ど、
八、分、目、に、
に、す、

グローバルコース3期生オリエンテーション mission No.1

問 キングクロス駅の写真です。この写真の解説を200字以内で書きなさい。(句読点1マス扱いとする)なおこの問は、生徒間での相談や他の情報源を利用することを禁止とします。提出は4月18日(火)総合授業時。



・この写真は全体的に暗く、階段の奥に1人の男性がいてその男性の後ろ姿からは、寂しさを感じ取れる。階段の下にある赤い風船から連想される楽しさや無邪気さなどの明るいイメージとこの写真全体から感じられる暗いイメージは正反対で、階段の上下に男性と風船があることから階段の下が過去、上が未来と考えると楽しかった少年が大人になるにつれて数多くの不安を抱えながら生きているのだということが考えられる。

・この写真は風船と、場所と、人物に注意してもらいたい。場所は題名の通りキングクロス駅。即ち「駅」なのだ。駅には普通人がたくさんいるというイメージだ。しかしこの写真には、一人の男性しか写っていない。また、この駅は非常に暗い。天井に一つ明かりがあるだけだ。この暗さからは少なくとも希望は感じられない。よって、これはキングクロス駅周辺の通り人口の過疎化を意味する。手すりに付けられている風船は子供が少ないため、子供の手に渡ることなく、寂しげにくくりつけられている。この風船の色にも意味がある。というのもさっき説明した通りこの写真からは希望が感じられないのは風船の色が明るい色でないこともあるからだ。この風船の色は暗い赤だ。

【生徒の感想】

- ・はじめに意見を交換した時一人一人全く違うことに驚きました。他人の考えを聞いてなるほどと思うものもあったので他人の意見を聞くのは大切なことだと思います。自分の考えも広げるために今後も様々な人たちの意見をしっかり聞いていきたいです。切り口を想像し、考え、そこから想像を広げていくというのは予想以上に難しかったです。しかしグローバルコースということを軸にキングクロス駅の問題を考えると、最初に問題を見た時よりもスラスラと考えが浮かんだように思います。今回の問題を通して一つの問題どこを切り口にして考えるかということはとても大切だと感じました。これからグローバルコースで様々な問題に取り組み、グローバルリーダーを目指して頑張りたいと思います。
- ・各班のプレゼンテーションを聞きました。内容も同じものもあれば、少し違うものもあり、人によって考えが異なることを改めて実感しました。発表の仕方も班ごとに異なっていたので(具体例を入れたり、劇をしたりなど)今後のプレゼンテーションの参考になりました。これらのことをふまえ、次のプレゼンテーションでは、もっと興味を持ってもらえるものを作りたいです。

【講評】

漠然とものごとを眺めるのではなく、恣意的に視座を定めれば新たな発見や気づきに繋がることを生徒達は体感できた。また、様々な意見を集約していくという作業の中で、意見をまとめる難しさや、発展的な議論を導く難しさを体験できた。その点では当初の狙いは果たせたと言える。ただ、一部のグループは時間内での作業終了を主眼としていたので内容の充実度を重視するよう働きかける必要を感じた。

②1年 STEP ゼミ(基礎)

前期は Political (政治学的分野) と Economic (経済的分野) を、後期は Societal (社会学的分野) と Technological (科学技術的分野) を行った。

1) Political (政治学的分野)

【意義・ねらい】

- ・ 他国の文化に関する関心を高め、異文化を持つ者同士でより良い関係を築くために必要なことを考える。
- ・ 調査、発表などに必要な技能を高める。
- ・ グループ活動を通して、課題解決力や問題解決能力を養う。
- ・ 自国の主義主張を押し出して意見を通すという、いわゆる「ディベート」ではなく、他国との歩み寄りを考える「協調性」の精神を養う。

国際政治に関する理解を深める取り組みとして、最終的に「模擬国連」参加に向けての練習課題に取り組む。そのための演習課題として、昨年度に引き続き「国連弁当」を題材にした。国連会議の合間に同じ弁当を食べるとするどのような弁当が適当か考える課題である。メニューを考えるには世界各国の食文化、経済状況、国の産業など様々なことを考える必要がある。「弁当の中身を考える」という身近なテーマで生徒に取り組みやすさを与える一方、メニューを考えるには世界各国の食文化、経済状況、国の産業、宗教など様々なことを考える必要があり、総合的な知識や情報収集力が問われている。今年度は、マレーシア・メキシコ・ドイツ・サウジアラビア・ナイジェリア・ベトナム・ブラジルの7国が中心となって国連弁当の会議を行っているという想定で課題に取り組んだ。



【授業の流れと生徒の感想】

回	内容	生徒の感想等
1回目	ガイダンス	しっかりと自分に任せられた仕事をして、チームに協力できるようにし、円滑にグループの議論を進めていくことです。
2回目	Position Paper (国の基礎情報)作成	Politicalで発表する時に中途半端な知識で臨むのではなく、学校1詳しいと言えるほど調べて、情報の“抜け”がないように徹底したいです。その時により効果的な情報を用いた資料を作ってプレゼンしたいと思います。
3回目	Position Paper グループ発表	改めて人の前で喋る難しさを知った。時間が迫っていたがアドリブが利かずそのまま原稿を読んでしまって班の方に迷惑がかかってしまった。質問された時に、ちょうどその内容を調べていたのにうまく言葉にできなくて説得力ある説明ができず、一言しか返せなかったのが悔しい。たくさんのことを頭に入れて発表に臨まなければならないことが分かった。
4回目	前回の振り返り 政策立案(1)	話しているときの口調が聞き取りにくかったり、図を上手く使えていないという指摘を得ることができ、課題がまだまだあることに気付かされました。
5回目	政策立案(2)	各国の宗教的な事を考えるとなかなか思った料理を使えないので大変でした。

6回目	決議案のグループ発表	多くの宗教がある中、どの国でも肉類が問題点となっていた。その解決策として、フェイクミートを代わりに使ったり、ベジタリアン用のメニューを作ったり、選択式にするなどして解決を図っていた。プレゼンテーションでは、各班、説明の途中で出てきたものの具体的な写真がないなどの問題点があった。
7回目	決議案の修正	他国への配慮が少なかったと実感しました。輸入先を工夫することで他国への利益を考慮していこうと思います
8回目	決議案提出・まとめ	今回のゼミでは、発表や様々な作業や思考を行い、これから先の活動で役に立つ経験も多くできた。

【生徒作品・成果物】



▲サウジアラビアの議決書



▲国際シンポジウムでのポスター例

【講評】

- ・「国連弁当」というものを考える上で、各国の習慣や宗教の観点から、全世界の人々が納得して食べられるものというのは限りなくゼロに近い。だからこそ、自分の主張を突き通すだけでは、円滑に話し合いが進まないということを、身をもって学べるいい機会になったと思う。
- ・本来ならば、各国との利害を調整するための「交渉」という作業を重点的に学んでほしいと考えていたが、授業数の関係や班の数の関係で、時間をあまり割くことができなかった。したがって、前年度とほぼ同様に、基本的に決議案の作成までを授業内で扱った。残念ながら前年度と同様に、「弁当の内容の発表」というものが Political の授業の大部分になってしまう結果となった。「交渉」の部分は、ほとんど各グループの授業外課題とならざるを得なかった。
- ・生徒たちには、この Political の授業をきっかけに「模擬国連」というものを身近に感じてほしいと思う。そして、来年度からは本格的に『全日本高校模擬国連大会』に出場することを目指したり、他の私立高校との模擬国連の練習会に積極的に参加するなど、たゆまない努力を続けてほしい。

2) Societal（社会学的分野）

【意義・ねらい】

- ・表計算ソフトによる統計処理を行う。
- ・論理的思考力を養う。
- ・社会調査を行う。
- ・データから人を納得させる立論を行う。

本授業の目標は、仮説の真偽を明らかにするまでの手法（データ分析）を確立させることである。その手段として今回はアンケート調査を行い、統計処理を実施し、仮説の真偽判定を行った。また後期のゼミということで、PPも文字に依存し過ぎない「視覚的」なものを作成するよう促した。

【授業の流れ】

1回目	各学問領域の説明と社会学についての説明
2回目	アンケート実施についての説明と班活動によるテーマ設定
3回目	テーマとアンケートのアウトラインを決定し、概要PPを準備する
4回目	PPによる中間報告会を実施し、他の班から意見をもらい修正する
5回目	アンケートの結果分析と推論の立案
6回目	発表の準備
7回目	発表
8回目	反省と次年度ゼミについて説明

【授業時のPP及び生徒作品】

1. テーマ発表

テーマ一覧

- ① 社会マナー
- ② 郷土、地元意識
- ③ コンビニ
- ④ ポイント制度
- ⑤ モバイル
- ⑥ ファッション、流行
- ⑦ 日本の年中行事
- ⑧ 本校カフェテリア環境

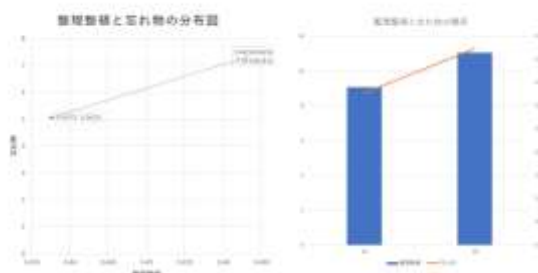
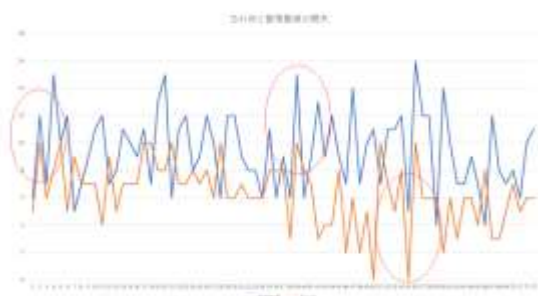
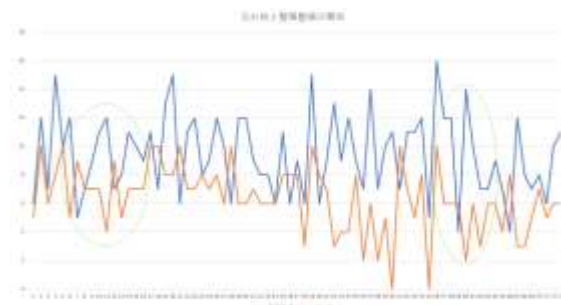
上記以外に設定したい場合は、本日中に相談すること。

社会学の手法

- ①あるものを取り上げて、社会の流れとの関連性を考察する。（前回のファッションのような形）
- ②ある事柄に関して、地域や年代別の傾向を分析していくような考察。
- ③社会的に常識として疑問を持たれないまま流通しているものについて調査をして、実態を明らかにするような考察。

高1のSocietalではアンケートを利用して②か③を検証してもらいます。

例) 整理整頓ができていない人ほど失くし物や忘れ物が少ないだろう



【生徒の感想】

《良かった点》

・ Societal ではデータの分析をしたので、STEP の中で 1 番準備に時間がかかった。データの分析では excel を用いたが、仮説を検証するにあたってどのグラフが 1 番わかりやすいのかをよく考えなければならなかった。1 つ 1 つの作業は大変だったけど自分たちが日常当たり前だと思っていることを仮説として、それについてアンケートを取り、数値的に検証することは面白かった。

《反省点》

・ 回答結果や仮説の検証を明確に示すことができていなかったように思う。自分たちは調査をしたので分かっているが、初めて提示された人の視点からでも理解できるようにすべきだった。アンケート結果から分析し、さらにその理由まで考えている班もあり、一歩先を考える、ということを学んだ。

【講評】

今回の発表では、「仮説の真偽及び過程と反省・生徒間での相互評価」を行った。
 まず仮説テーマの設定に毎年苦労しているとの報告があったので、本年は事前に 8 個テーマを提示した。しかしその中でも設定できず苦労したチームが多く、滑り出しが悪かった。その後アンケート作成を行った。生徒たちも過去にアンケート回答側の立場を経験しているため比較的スムーズに作問できていた。また統計処理についても「情報」の授業で習得済のため、滞りなく進められた。だが、データの結果に対して客観性が乏しい分析となってしまったことや、生徒間での相互評価においては課題が残った。原因は、生徒自身の評価軸が未熟であるがゆえと考えられる。これを改善するには、大手企業のプレゼンテーションや統計処理などの「本物」に触れさせる機会を増やす必要があるだろう。

3) Economic (経済学的分野)

【意義・ねらい】

- ・社会的な課題の解決に取り組む企業について企業活動や技術の動向を知る。
- ・ヴァーチャル投資を行って経済・市場の動向を知る。

生徒は経済の仕組みや企業活動についての知識が少ない。様々な社会的な課題について取り組んでいる企業が多いにもかかわらず、その活動は高校生には見えていない。次年度に SP を行うにあたって、企業活動や技術革新の分析を通して、経済や企業の基礎知識を身につけさせ、さまざまな地球的・地域的課題を解決するための発展的な議論が出来る素地を育成することを目標とした。

授業は情報を与えるのではなく、自ら情報を求めさせる方法として、日経ストックリーグ(ヴァーチャル投資)の手法を活用することにした。企業への投資行動によって、企業がどのような活動を行っているか、どのような技術をもっているか、どのような社会的貢献を行っているかといったミクロな視点を養うことが期待できる。また、希望者を対象に日経未来投資プログラムに参加し、ヴァーチャル投資を一般の人々と競い合った。これらを通して、株価の変動は内外の経済、政治など様々な影響をうけ、マクロな視点を養うことができる。

【授業の流れ】

1・2回目	5月	テーマ設定
3回目	6月上旬	テーマに関する企業を調べよう
4回目	8月下旬	スクリーニングについて指標を考える
5回目	9月上旬	スクリーニング作業
6回目	9月下旬	発表の準備
7回目	10月中旬	発表
8回目	10月下旬	レポートの完成 総括

【生徒作品・成果物】



【生徒の感想】

<1回>

- ・今回の economic ではブレインストーミングを楽しんでできました。人の意見を見たり聞いたりすることで、こんなことがあったなと思い出すことも何度かありました。今後 未来投資プログラムのやつもやっていきたいです。
- ・関心のあることについて意見を出し合い、ブレインストーミングを使って議論し、表を作成した。1人で考えるよりも多人数で、無言よりも声を出して取り組む方がやはり効率が良かった。Eの授業では株式について学んでいくみたいなので、何が大切か見極める能力が必要となってくると思う。早くもっと株について学びたいと思った。

<2回>

- ・今日は、自分ではわかっているようでも全然わかってないんだということを強く感じました。次の時までにはできるだけ調べておきたいと思います。
- ・今回は最後まで問題点や課題を考える作業でした。課題から問題点がなかなか出てこなくて苦戦しました。ニュースの内容の何が問題なのかがわからないのでそれらの問題点もわかりませんでした。ア

メリカは壁を作ろうとしているのは知っているけど、それがなぜかをわかっていないなど。ニュースもチラッと見ているだけで内容をあまり考えていないんだなと実感しました。これからはニュースだけでなく新聞などで幅広く知識を広げていきたいです。

<3回>

- ・今日はテーマ決めとそれに関連する会社を調べた。投資テーマはすぐに決まったものの自分達が普段調べないような物事にそって調べることに難しさを感じた。もっとテーマの中でもさらに絞って会社を決めていきたい。

<4回>

- ・テーマに沿った企業を調べました。防災とはいっても防災グッズや耐震、復興などいろいろあるので探すのは大変でした。用語などもまだ調べられていないので次回までに調べておきたいと思います。会社が自分が思っていたよりも多くいろいろなことをしていたので見逃さないようにはばひろくしらべていきたいです。

<5回>

- ・思った通り調べた会社の個数が少なく、まず指標を考える前にもう少し会社を増やそうということになった。やはり考えた会社や言葉で調べてみた会社が上場してないことが多く行き詰まっていたが、先生から最初のテーマを決めた時に関連のあるものにどんなことがあったか、食に関して作る、食べるだけでなく、他にどのようなことが連想されるかと言うことを考えてみるのが良いと聞いた。まだ会社数が少ないので先生のアドバイスを元に増やしていきたい。

<6回>

- ・前回に決めて調べてきたもので、事業数とCSRの基準が怪しかったので指標をもう一度考えた。事業数と利益、従業員数は日本経済新聞からとることにした。財政は利益で点数を分けた。CSRは宇宙関連のものか、人材育成のものか、その他で点数を分けた。あとは事業数と、労働生産性、売上高研究開発費率にした。

<7回>

- ・今まで学んだことを総まとめし、発表をした。少し緊張してしまったり時間がなく早口になってしまった。またパワーポイントをもっとしっかり作っておくべきだった。反省点がまだまだ多かった発表であったがこの失敗を次に繋げていきたい。

<8回>

- ・今までの活動を通して投資の難しさを学んだ。今まで投資は適当に企業を決めて投資していると考えていたが自分でしてみると投資しようと思う企業の安定性、安心性などなどいろいろなことを考えなければならぬことが分かった。これからこの経験を生かしていきたい

【講評】

テーマ決めではブレインストーミングの授業のあと、すぐに活用できたくさん意見がでたようだった。しかし、思った以上に知識がなく、ニュースの何が問題なのか分らなかつたりと最終的なテーマ決めで時間がかかった。他の授業の課題などが間に入り、集中して取り組むことが出来なかつたようで、全体的に進度が遅れていった。テーマの設定方法を検討したほうが良いと感じた。

最後に、1チームが第18回日経STOCKリーグ敢闘賞を受賞した。レポートは「Fight Against Infections～Efforts by Companies in Japan～」で感染症をテーマとした。日経STOCKリーグのホームページでレポートが公開されている。



4) Technological (科学技術的分野)

【意義・ねらい】

- ・環境問題について関心をもってもらう。
- ・データが示している内容を正しく読み取る。
- ・論理的思考力を養う。
- ・グループ活動を通して、協調性と問題解決能力を養う。
- ・調査・分析、発表などに必要な技能を身に付けさせる。

科学的な視座の基礎を身に付けるため、私たちの身の回りで起きている「環境問題」について研究を行った。環境問題と一言でいっても多種多様で、またそれぞれの問題に対していくつもの要因があり、とても複雑なものである。そのため環境教育が盛んな滋賀県の琵琶湖環境部に協力していただき、琵琶湖に見られる環境問題をテーマに、高校生のレベルで研究を行い、発表を行った。

序盤では「琵琶湖と環境」について授業を行った。まずは琵琶湖の価値を認識させ、その後、琵琶湖に見られる環境問題を取り上げて、現在の取り組みや対策を紹介した。より具体的な環境問題を取り上げることで、原因となっているものにはどのようなものがあるのか、またそこであがってきた複数の原因の関係性などを考えさせた。一部、琵琶湖環境部政策課の田仲輝子氏にご講演していただき、琵琶湖の価値や過去から現在までの課題の変化などを教えていただいた。

中盤からは班ごとの活動を主に行った。授業で取り扱っていく琵琶湖の環境問題を「湿地」「里山」「水」「外来生物」の4分野に絞り、生徒一人ひとりに自らが取り組みたい分野を選択させることで、班のメンバーを構成した。その後、各班でブレインストーミングを行い、選んだ分野において現在確認されているより具体的な環境問題をあげていき、その中から各班が最終的に取り組んでいく環境問題を決定した。

次に、問題提起をするために取り組む環境問題に関する数値やデータを調べた。数値やデータからなぜそのような結果となっているのか、結果は何を表しているのか、結果からどのようなことが言えるのかを考察した。

終盤は、データ分析の結果見えてきた問題を解決または緩和するために、現在どのようなことが行なわれているのか、また今後どのようなことを行っていくことが必要であるかを様々な視点から考えた。

以上のことを、まとめてプレゼン発表を行い、評価は担当教員が作成した以下に示すルーブリックによるものとして、生徒がそれに従って採点し集計を行った。

プレゼン発表に関するルーブリック

観点 \ 点数	1	2	3	4	5
時間(5分)	±91秒以上	±61秒～90秒	±31秒～60秒	±11秒～30秒	±10秒以内
原稿	すべて見て	ほとんど見て	チラ見6～10回	チラ見1～5回	1度も見ず
声の大きさ	とても聞き取りにくい	聞き取りにくい	普通	聞き取りやすい	とても聞き取りやすい
説明	分かりにくい	少し分かりにくい	普通	分かりやすい	とても分かりやすい
展開	全く興味がわかない	つまらない	普通	おもしろい	とても興味深い

【授業の流れ】

1 回目	琵琶湖に見られる環境問題についての講義		
2 回目	琵琶湖の保全と再生についての講義(講師:琵琶湖環境部 政策課 田仲輝子先生)		
3 回目	取り組むテーマの決定	4 回目	調査結果の分析
FW(希望者)	現地に足を運び、現状を見ることで、課題への取組方を考える。		
5 回目	技術調査	6 回目	発表準備
7 回目	発表	8 回目	反省・まとめ

【生徒の感想】

- Technological は私的には関連性が多く、考慮することが多く一番難しく感じました。
- 発表では、図や表をうまく使わないといけない。Technological の授業を受けて、今まで知らなかった琵琶湖の環境問題や、それを解決するために行われている技術などを知ることができて楽しかったです。
- Technological を終えて、正しいデータを、理解して使うことの大切さに気づいた。また、最先端の研究、今後行われる研究、今後行いたい研究に興味を持つことができた。
- 色々な班の発表を聞いて、琵琶湖の環境問題の解決策には、様々な技術があることを知りました。やっぱり一つの問題にいくつもの解決策があるので、ある一つの考えにとらわれずに色々な観点から物事をじっくり観察することが大切だということを、改めて実感しました。



【講評】

(良かった点)

- プレゼン内容は教師が提示することで、発表では流れが作りやすく、内容において矛盾や主旨が全くつかめないような発表はなかった。
- 同じような環境問題を選択した班があったが、取り組むテーマをさらに細かく絞るように指示したので、それぞれの班が自分たちで調べた結果や改善点を発表し、結果としては同じような内容のものはほとんど出てこなかった。
- Societal および Political での発表を終えてからの発表だったので、発表における基本的な素養や技術などはある程度身につけており、発表の準備では、Technological 分野以外での指導にはほとんど時間がかからなかった。
- 数値やデータを用いているので、生徒たちの論理的な思考力を磨くことができた。

(反省点)

- 関係書物の紹介などは行ったが、用いられるデータベースはほとんどがネット上でのものに偏り、一部説明に欠け、信憑性が不確かなものがある。
- 扱う内容には高度なものもあり、教員では指導するのが難しいものもあるので、生徒も完全には理解しきれていないことがあった。



③1年 Global English (グローバル・イングリッシュ)

【Course Mission Statement】

By carefully observing, researching, discussing and presenting dominant cultural aspects of Japanese society, we will endeavor to not only create a deeper understanding of Japanese cultural attributes, but also simultaneously increase our sensitivity and best practice skills on relation to global communication and intercultural issues.

【Required Academic skills】

Students will be exposed to and expected to practice the following academic skills.

- Effective research skills (E.g. identifying valid resource material)
- Effective reading in relation to sourcing research content (E.g. skimming, scanning, academic article approach)
- Effective writing skills
- Effective presentation skills
- Effective thinking skills
- Effective questioning skills
- Effective discussion skills
- Teamwork



【Syllabus】

1st term

Class 1 —decide on a topic (from below) and start putting together a plan of how it will be researched and presented.

- | | |
|---|---------------------------------------|
| 1.Ambiguity and the Japanese | 2.The Japanese Sense of Beauty |
| 3.Silence in Japanese Communication | 4.Male and Female Relationships |
| 5.Japanese Social Obligation | 6.Private vs. Public Stance in Japan |
| 7.Adopting Elements of Foreign Culture | 8.The Japanese Virtue of Modesty |
| 9.Seniority Rules in Japanese Human Relations | 10.Japanese Group Consciousness |
| 11.Dual Meanings in Japanese Human Relations | 13.The Japanese Custom of Gift Giving |
| 12.Simplicity and Elegance as Japanese Ideals of Beauty | |

Class 2 —Start putting together the script of a role-play that explains your understanding of your particular topic.

Class 3 —Present and film your role-play. Q and A sessions with classmates and teachers.

2nd and 3rd term

The second and third terms introduced students to facets of intercultural communication, and in particular, how intercultural communication relates to English language learners in Japan.

The classes gave students the opportunity to think about and reflect on all the components that go into the acts of international communication. The approach was perhaps somewhat alien to the students in that they had to give thought to areas of their lives that were heretofore not evident. A good example of this is deep culture – the ingrained aspects of culture that act as a backdrop to

motivations in an individual's daily life.

Prior to each class, the students undertook a prescribed reading and answered vocabulary and comprehension related questions in relation to the text. This meaning-focused input activity assisted the students in reviewing and learning further English. Classwork then transferred to a more meaning-focused output activity where students were required to discuss and write about their opinions, thoughts, and feelings on the various unit themes presented.

The instructors of this course focused more on output skills by encouraging active classroom discussion on each theme. While the output was mostly verbal, there was a written component post-class where students focused on a question that appealed to them and wrote a small passage. This written work was then reviewed by the teachers, and feedback was offered.

One crucial part of this course was having teachers that have lived in various cultures openly share their experiences and opinions with the students. This approach acted as a trigger for students to also openly share and reflect on their own experiences.

One satisfying aspect of these classes was observing students encounter new areas of thought and watching them attempt to express their opinions on these newfound areas of knowledge. The learning did not end along with the class. Students digested various aspects of global culture, and will continue to use this knowledge as they grow into adults. It is this mindset alone that will have made this course a success.

【Students' Comments】

- We learned how to explain Japanese customs in English. It was difficult for me to put our unconscious behaviors in different language. Through this project, I became able to discuss in English, and to perform in front of other people. However, I still feel anxious to perform in front of large crowds, so I need to train for that.
- The context of the passage we were assigned in the lesson was difficult, so I could not actively participate in the group work during the first half of the class. I was able to appreciate the uniqueness of intercultural differences by comparing foreign cultures to Japanese culture. I started to become interested in different cultures.

【Teachers' Comments】

Students were systematically exposed to various aspects of Japanese culture. As groups, they selected a particular Japanese cultural trait that captured their interest. In observing these cultural traits, students were then required to continually reflect on the origin of these traits, their predominance in the everyday lives of the students, and how representations of these cultural norms affect communication with other cultures and countries around the globe.

This was a first crucial step in 'critical observation' for these students. A step that is relatively difficult to quantify by means of physical pedagogical assessment (i.e. a written essay). This initial process turns the observers' views within, and to many students this can be quite an alien environment. They are attempting to view aspects that are so ingrained and part of them that they for the most part seem if not invisible, indescribable.

The students realized the difficulty of such introspection and observations, and by their comments, and active participation in class discussion, it could be assessed that they have *started the ball rolling* in relation to developing an open an inquisitive mind towards the cultural components that make up humankind.

④ 1年講演会・特別授業

No.	日程	講師	内容
1	5/2 (火)	立命館大学大学院 テクノロジー・マネジメント研究科 湊 宜明 准教授	①発散と収束という思考技法について ②ブレインストーミングが起きるような発明はメンバーの多様性から起こるとい調査結果をもとに、多様なメンバーでの議論が大切であることを学ぶ ③上記2点を受けて、具体的にグループでブレインストーミングを行ってみて、発散と収束というプロセスを実際に簡単なテーマで体感する。
2	6/2 (金)	関西学院大学 国際学部 吉村 祥子 教授	①「世界がもし100人の村だったら」を題材に、国際的な観点をもって物事を俯瞰することの重要性を学ぶ。 ②「貧困」というものを中心に、教育や環境などの、諸問題における格差是正のための取り組みについて学ぶ。 ③実際に「役割カード」を用いてワークショップを行い、様々な境遇に置かれた人たちの比率を可視化することで①、②の内容をさらに深めることを目標とする。
3	6/13 (火)	滋賀県琵琶湖環境部 琵琶湖政策課 田仲 輝子 先生	①琵琶湖の価値について ②琵琶湖における課題と取組の経過 ③琵琶湖における取組について
4	6/30 (金)	関西学院大学 社会学部 村田 泰子 准教授	①社会学という学問領域について ②ケアと社会—児童虐待の低減をめざす文理融合プロジェクトの経験から—
5	9/5 (火)	関西学院大学 イノベーション 研究センター 土井 義之 教授	グローバル経済下の企業と産業～エネルギー経済から～ ①日常の疑問を経済学で考えよう ②エネルギー経済のしくみ～産業内と産業間～ ③エネルギー経済と経済学～経済学の基本的な考え方～ ④企業・産業の経済分析の方法について
6	1/13 (金)	京都大学化学研究所 物質創製化学研究系 構造有機化学領域 若宮淳志 准教授	①太陽光発電の仕組みと基本原理 ②ペロブスカイト型太陽電池について ③エネルギー問題・環境問題について ④上記のような研究が進展してくことによって社会がどのように変容してくか





⑤1年 Field Work (フィールドワーク) 等

No.	日程	場所	講師等	内容
1	7/11 (火)	関西学院大学 西宮上ヶ原 キャンパス	関西学院大学 国際学部 吉村 祥子 教授	「国際問題について」 ①関西学院大学の吉村先生のゼミ生7名による論文のアウトラインの発表 ・国際法や国際政治、紛争などについての発表を聞く。 ・質疑応答をしながら理解を深める。 ②4つの班に分かれてグループディスカッション ・論文の内容の理解をさらに深める。
2	7/18 (火)	産業技術総合研究所 関西センター	無機機能材料研究部門 堀内 哲也 研究員	「アイデアとコンセプト」 ①「旅行先を1つ設定し、1ヶ月遊ぶことができる遊具を考える」というテーマで商品を発案・発表する。ブレインストーミング形式で意見を出し合う。 ②電子顕微鏡などの設備見学
3	7/24 (月)	関西学院大学 西宮上ヶ原 キャンパス	関西学院大学 社会学部 村田 泰子 准教授	「ジェンダーの観点から見た中国と日本」 ①村田准教授より日本の子育てについての現状と家族関係の変化について講義を受ける。 ②上記①を基に、2班に分かれ、中国からの留学生に中国での子育てや家族についてインタビューを行う。 ③各班で日本との違いや意見をまとめ、発表・共有する。
4	7/31 (月)	滋賀県高島市	滋賀県庁水産課主査 亀甲 武志 氏	「琵琶湖での環境問題」 ①三和漁港にて施設内の見学と講義を受け、琵琶湖に見られる環境問題とその現状を理解する。 ②針江地区のカバタ見学。 ③ヨシ帯の観察。
5	12/6 (水)	大阪大学 豊中キャンパス	大阪大学 文学部 加藤 洋介 教授	「グローバルリーダー像及びリーダーに必要な能力とは」 ①1グループ(生徒4~5名と留学生2名)に分け、アイスブレイクの時間をとる。数分で班を移動し、留学生全員と話すようにする。 ②各班で「グローバルリーダーとは」というテーマでディスカッションを行う。 ③上記②を基に、各班が報告、意見の共有を行う。



2. 二年生

①2年 STEPゼミ

1) Political (政治学的分野)

【意義・ねらい】

模擬国連では自らの担当する国の課題を探り出し、解決のための決議案を考える。そしてそれが決議となるよう、他の国から理解が得られるよう説明し、折衝する。この取り組みを通して生徒たちは、政治とは「最大多数の最大幸福」を実現するものであると実感し、自国だけの利益にとらわれてはいけないうことに気づくはずである。この自己にとらわれず多様性を認める姿勢こそ、生徒たちが政治を学ぶことを通じて身につけるべきものである。

具体的には、①1名ずつ担当国を決定、②担当国の政治・経済、課題等の調査、③発表準備・練習、④担当国代表として討論、という流れで展開する。

本年の前半は「エネルギー安全保障」をテーマとし、第1回会議を開催した。後半は、テーマ自体も生徒たちで決定し、「乳幼児死亡率」について第2回会議を行った。これらの会議参加により、他国への関心、課題発見・解決能力に加え、専門知識の取得（法令等の読解）、プレゼンテーション能力や表現力、交渉力などを養うことをねらいとした。

【授業の流れ】

1回目	第1回 会議	授業ガイダンス、担当国決定、議題発表
2回目		議題についてのレクチャー①、Position Paper(基礎情報)作成
3回目		議題についてのレクチャー②、Policy Paper(政策立案書)作成
4回目		政策発表、決議案を考える
5回目		会議1日目(公式討議、非着席討議)
6回目		会議2日目(非着席討議)
7回目		会議3日目(非着席討議、投票)
8回目		第1回会議レビュー
9回目	第2回 会議	議題決定のための話し合い、担当国決定
10回目		議題についてのレクチャー①、Position Paper(基礎情報)作成
11回目		議題についてのレクチャー②、Policy Paper(政策立案書)作成
12回目		政策発表、決議案を考える
13回目		第2回会議(1日目・非着席討議)
14回目		第2回会議(2日目・非着席討議)
15回目		第2回会議(3日目・公式討議)
16回目		第2回会議レビュー

【生徒の感想】

- ・ 様々な国の立場で世界の協定を決めることはとても難しいと思った。また、1つの物事に対して様々な解釈があるなかで、それらをまとめあげ協定や条約の形にする国連は改めてすごいなと思った。
- ・ 難しかったことは、自国と他国の意見を融合させることだった。自国ばかり考えていても良くないし、他国ばかり優先すれば自国に不利になる。利害の一致が難しいなと思った。
- ・ 自分の立場を一つの国の代表者として議論を行うことが新鮮だったし、自国の状況や利益について考慮するのはやはり難しく思った。
- ・ 私は **Political** の授業を通して、世界には多くの解決が難しい問題があることを再認識し、各国の首相などがどのように議論しているのかを少し感じる事が出来ました。世界で起こるちょっとした出来事で国同士の関係が変わることで国際的な問題を解決する上での議論でさえも変わることを知り、今後は普段から国際的問題に気をつけていきたいと思いました。
- ・ 自国の提案を他国に交渉する際、自国の利益をおさえつつ、他国にもメリットがある政策を考えなければいけなかったのが自己中心的な政策に傾きがちだった印象です。模擬国連大会の予選だけでも難しさを痛感しました。
- ・ 今年一年間の **Political** の授業を通じて、複数の国がまとまることの難しさとか、世界中の様々な、私たちが体験したことのないような問題がまだまだあって、その解決には、もっとたくさんの障害があるんだなと感じました。科学技術があれば解決するのかなと思っていた問題も、そんなに単純じゃなかったり、置かれている状況が似ていても同じ解決方法で行けるわけじゃなかったりと、考えさせられることが多かったです。この授業をどこかで活かすことができるように頑張ります。



【講評】

《良かった点》

- ・ 授業後に実施したアンケートでは、「テーマに興味・関心を持つことができた」、「課題発見能力が伸長した」などの項目において、肯定的な回答が多くみられた。
- ・ 難解なテーマであっても、批判を繰り返すのではなく、建設的に会議を進めることの必要性について学ぶことが出来た。
- ・ 第11回全日本高校模擬国連大会に参加する者が出た。

《反省点》

- ・ 作り上げた決議案を発表する場が持てればよかった。外部機関との連携や、コンテストへの応募の機会を模索したい。
- ・ 会議でコンセンサスを得るという目的を正しく理解しないまま進めている者がおり、会議の趣旨を徹底して伝えることの必要性を感じた。

2) Societal (社会学的分野)

【意義・ねらい】

社会学という曖昧かつ広範な学問について、共通認識を持つため最初の課題として入門書の購読と要約などを行った。

その後はこれまで学校内部のみの活動にとどまっていたのを改善するため外部コンテストへの参加を決め、授業はそのコンテストの内容に従った。結果として1年間 Project based learning (PBL) の授業を行うこととなった。

前期では観光甲子園、後期ではキャリア甲子園に参加し、一定程度の効果はあったのではないかと思う。外部コンテストへの参加によって他校生との交流や社会人からのフィードバックを得る機会もあり、新たな視角が開けたのではないかと考えている。

【授業の流れ】【授業の流れと生徒の感想】

1回目	『古市君、社会学を学び直さない!!』についての要約と解説
2回目	「キャリア甲子園」への導入として観光についての概説
3～6回目	プランの作成
7回目	プラン発表
8回目	「キャリア甲子園」参加にあたっての説明
9～13回目	応募先企業の選定とプラン作成
14回目	校内発表会
15回目	プランの再構築
16回目	総括

【生徒の感想】

・チームプレーが出来ず、予定や段取りがギリギリになり、あまり結果を残せなかった。動画では、原稿も、覚えていなく、伝えようという気が見られない動画だったと思う。しかし、良い経験になり、楽しかった。

・その企業や同職種のライバル企業について調べることで企業によって経営理念が違うのでその違いを比べたりするのは楽しかったです。ただ、プランを作るにあたって細かいことまで追求できていなかったように思います。これからは、いろんな方向から物事を見ていけるように頑張りたいです。

・映像を撮って投稿する、というのが初めての経験だったためうまくプレゼンができなかったです、また出てくる発想に実現可能性を持たせるのが下手くそだったので地に足のついたアイデアを以降は考えようと思う

・僕はキャリア甲子園に参加して今までにない考えをうみだすことの難しさを改めて実感することができました。普段は新しい成長戦略などを何気なく眺めて終わっていたのですが、自分たちがいざ考えると案を出したところでどうも今まで自分たちが無意識的に見てきた側面からしか物事を考えて

しまい、革新的な idea を出すことが出来ず壁にぶち当たるが多々ありました。案をまとめて振り返ってみると、もう少し変えるべきところがあったのではと思うこともありますが、それはただの結果論で、実際問題これで良かったと思えるところもあります。今後は何気ない企業の成長戦略でももう少し注意して見てみようかなと思いました。

・今まで行ったグローバル活動の中で一番テーマが曖昧だったので、何をすればいいのかわからず大変でした。実質最後のグローバルだと思うので、後悔しないようにたてた予定通り進むよう話し合っています。

【生徒作品・成果物】



【講評】

一年を通じて審査を受けるという体験をすることによって、生徒自身は発表のクオリティを気にするようになったと感じられる。また、明確な期日設定があるため、その部分に対する意識も以前よりは少し改善したように感じられる。

企業や外部への提出を考えた時にはアイデアの斬新さと実現可能性、それを証明するデータの提示という手順をしっかりと踏む必要がある。そのことに関しては年間を通して意識させ、シナリオ・プランニングの実施に際しても意識がされているのであれば効果が認められたと言えるだろう。

社会という実態のあるようなないようなものを分析する際には、伝統的に研究の蓄積がある既存の学問領域の成果を参照することが不可欠であり、各学問分野の連動性というものも意識されたと考えている。

シナリオ・プランニングで未来の予測をするにあたっては社会や人間という要素を排除することは不可能であり、しっかりとしたシナリオを書いてくれることを期待している。

3) Economic (経済学的分野)

【意義・ねらい】

経済と一口にいても、経済政策や企業行動、金融政策や株・為替などその対象は様々である。SPにつながる経済の知識を身につけさせるとともに、グローバルリーダーとしての資質や実際の進路選択にもつながる活動を考えた。その手段として、日本経済新聞が主催している日経ストックリーグを用いた。日経ストックリーグは大学生を中心としたポートフォリオ作成のコンテストであるが、高校生や中学生も参加し、高校生が優勝していることもある。様々な社会的な問題をテーマにし、企業活動を研究しながらポートフォリオを組むことで、金融政策や国際関係など幅広い知識の習得も含め、経済的な考え方や知識が身につけられる。

【授業の流れ】

1回目	ガイダンス、関心のあるテーマについてのミニプレゼンテーション
2回目	経済学の基本概念に関する発表
3回目	経済学の基本概念に関する講義
4回目	過去受賞レポートについての検討、各班の活動（発表準備）
5回目	過去受賞レポート検討結果の発表（関西学院大学経済学部 平山教授も指導）
6回目	関西学院大学経済学部 平山教授による講義、レポートテーマの検討
7回目	各班の活動
8回目	日本政策金融公庫 中谷氏による講義
9回目	企業対応のロールプレイ
10回目	レポートテーマ・夏期取組結果についての発表
11～13回目	各班の活動、レポート作成
14回目	各班の活動、レポート作成・提出
15回目	レポート作成の振り返り
16回目	一年間の振り返り、作成・提出レポートの改善点発表

経済学の基本概念についての共通理解を培うことから始め、日経ストックリーグについての理解を深めていった。日経ストックリーグの理解を深めるため、過去受賞レポートの中から1つ選択して、①なぜそのレポートを選んだのか、②レポート作成者になりきって内容・魅力をアピールする、という2点に留意して発表を行った。結果、レポートでどのようなことが求められているのかを理解するよう指導した。なお、この発表の際には、関西学院大学経済学部教授の平山健二郎先生にコメント・指導を頂いた。また、日本政策金融公庫の中谷氏には、ビジネス・アイデア及びプランについて講義をして頂き、ビジネス展開についてのアドバイスを頂いた。両氏から、メールで質問に答えて頂ける体制を整えてもらい、心強い存在となっていた。

夏休み明けの最初の授業では経過報告という形で各班発表を行い、テーマ設定後は、各班が決めたテーマについて活動を行い、レポート作成に取り組んだ。各班ともテーマ設定に時間がかかり、またテーマ設定後も具体的なレポート執筆までに想定以上に時間がかかってしまったようである。

【生徒の感想】

ビジネスというものを少し深く知れたと思います。この一年の授業を通して感じたことは、ビジネスは欲深さと粘り強さだということです。一見ビジネスに見えないものをビジネスの土俵に乗せることが大事だということがよく分かりました。日経ストックでは迷い続けて結局消化不良になってしまいました。大事なことを一つに決めてそれを軸としてやっていくべきだったと思います。しかし自分が興味を持っていたエシカルについて知識が深められたのは良かったです。

ストックリーグに関しては世間を見つめ直す機会となった。ニュースや新聞を見る機会が増え、世の中の問題を新たに把握することができた。しかし、同時に自分たちの計画性のなさが目立った。最初のテーマ決定の時点からあまり深く考えずに物事を進めようとしていたように思われる。一番最初に自分たちのレポートをどのように書きたいのか、どのようなことを盛り込むのか大体決めておくべきだったと思われる。

改善点はやはり時間の管理です。これは日々の生活(もちろん勉強も)にも関わってくることで、時間の管理が出来ないが故に、納得のいくものが作れない。当たり前の事ですがこの当たり前のことが僕たちは全く出来ていなかった。そして時間管理が出来ていないのは初めてのことでなく、普段のグローバルのSPや、高一の時のゼミ、さらに中間発表や国際シンポジウムにおいても、後少し時間があれば何段階も上のものが作れたと後悔したことは今までに多々ありました。しかしそれらの経験を全く生かすことなく、結局今回もやり始めたのが遅かったという点は本当に反省しています。

【講評】

1年を通して課題を達成するため、経済学の基本概念やレポート課題についての共通理解を構築する計画を立てた。しかし、レポート執筆に必要な調査や情報収集に対する見通しが甘く、レポート提出の締切間際に作業が集中したチームが多かった。調査に必要な時間を確保できないことから、根拠・考察の甘いレポートも散見され、指導のあり方の課題となった。生徒達の進捗状況のチェック体制やスケジュールに対する危機感を持たせる仕掛け作りが必要だったと考えられる。



ストックリーグの活動において2学期以降は時間が足りない場合もあった。2学期以降はSPの研究が本格化し、国際シンポジウムの準備にも時間が取られたため、テーマ設定後のポートフォリオの構築という非常に大切な部分に費やす時間が限られる場面が見られた。最終的には、11月末までにポートフォリオ完成、12月からレポート執筆に本格化という状況だった。生徒達の状況は、客観的事実に基づいた論理的なレポート執筆という観点からは極めて弱さを感じさせる状況だったが、生徒達はそれぞれのテーマを深く追求して企業訪問やアンケート調査などを独自に行い、レポートへの取り組みを通して、経済学的視点の涵養と主体的な活動を実践できた面もあったことは評価できる。また企業分析を通じて、企業の事業だけではなく社会貢献活動などにも理解を深めることにつながったと考えられる。

4) Technological (科学技術的分野)

【意義・ねらい】

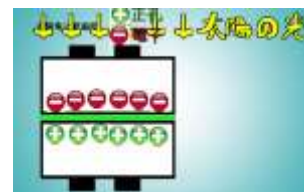
現在の世界が抱えるエネルギー問題について幅広い知見を身につける。そのために様々な電力問題や発電方法について学習する。中でも、化石燃料に代わるクリーンなエネルギーとして政府が導入・普及の促進を目指す再生可能エネルギーについて深く考える。これらを包括的に学習してシナリオ・プランニングに備える。

【授業の流れ】

1回目	科学的な実験の評価について
2回目	水蒸気補足実験（レポートの書き方）
3回目	前回のレポートの書き方の反省
4回目	現在の発電と太陽電池の概要の講義
5回目	さまざまな太陽電池について調べる
6回目	各種の太陽電池について発表
7回目	色素増感型太陽電池の作成
8回目	作成した色素増感型太陽電池の実験
9～11回目	国際シンポジウム準備
12・13回目	各自の興味をもった大学の研究内容を調べる
12月16日	京都大学 太陽電池作成実習
14回目	実習の振り返り、考察
15回目	ペロブスカイト太陽電池・SPの発表
16回目	ペロブスカイト太陽電池・SPの発表の振り返り、総括
3月14日	2 nd Electron Device Technology and Manufacturing (EDTM) Conference 2018 において、ポスター発表

【生徒作品・成果物】

生徒の太陽電池について
発表している様子と資料





色素増感型太陽電池を作成しているときの様子



ペロブスカイト太陽電池の講義・実習の様子

【生徒の感想】

- ・太陽光電池を調べた際にはそれぞれの電池の特色がわかったので、良かったと思います。次回行く京大はあこがれの大学なので、しっかりこの学びを今後に生かしていきたいです。
- ・自分で調べ発表することでとても知識と表現力を身につけることができました。実際に太陽光発電作ることもしました。自分が作った太陽電池を使って、オルゴールが鳴ったときは嬉しかったです。

【講評】

《良かった点》

- ・レポートを生徒に書かせることで、論理的に説明すること大切さを学ばせることができた。
- ・教師側から知識を教えるのではなく、生徒が自ら太陽電池について調べ、学べたのはよかった。
- ・発表は全員が説明する形式をとったので、全員が理解し、知識を定着できた。
- ・太陽電池を作成することにより、さらに太陽電池について深く学べた。
- ・なかなか研究する機会のない太陽電池を京都大学に行って、作製できてよかった。生徒も最先端の研究を目の当たりにして、興味を持って取り組んでいた。今後の進路について考えるよい機会となった。
- ・講義形式にはせずに、基本的に自分でまとめて、各人に太陽電池について説明させた。講義ではなかなか知識は定着しないが、自分で調べ、まとめ、説明することでアクティブな活動になった。

《反省点》

- ・専門的な言葉が出てきて非常に苦労していた生徒もいた。
- ・太陽電池の構造から理解するのは難しかった。
- ・太陽電池に焦点を当てて研究したため、環境や社会面を考える機会を持たなかった。様々な面から太陽電池に関することがらを考えることも大切であったと思う。
- ・太陽電池が少し高価で、生徒への負担が少し大きかったかもしれない。



②シナリオ・プランニング(SP)

【意義・ねらい】

シナリオ・プランニングの手法を学び、未来予測を行うことで、論理的な思考力の育成を行う。具体的には1年間で2種類のSPを行った。

①「コンビニ」をテーマとしたシナリオ・プランニング

手法そのものが複雑であるため、比較的生徒に身近なテーマを設定することを主眼にした。コンビニであれば生徒自身も日々使っており、かつ様々な要因にも左右される業種であると考えた。実際生徒からも様々な観点から発言があり適切であったかと思う。

②「エネルギー」をテーマとしたシナリオ・プランニング

本校のSGH構想のテーマが「未来のエネルギー事情」ということもあり、2回目のSPのテーマは「エネルギー」とした。卒業制作に直結するため、バランスを見て班分けを行った。

国際シンポジウム以後の活動では、それまでのエネルギーについてのSPを、三年次に完成させる卒論に向けて練り直していった。根本的なトピックや軸の設定からやり直す班が多く、難航しているが、扱う情報の量は増えており、情報を精査して論理的に構築する段階に差し掛かっている。

【授業の流れ】

1回目(4～6月)	「コンビニ」についてのグループSP
3回目(7～10月)	「エネルギー」についてのグループSP
4回目(11～2月)	「エネルギー」についてのSP 卒業制作作成

SPという新たな手法を教えるにあたり、以下のように様々な創意工夫を凝らした。

- ・テーマはできる限り身近なものから始め、最終的な目標であった「エネルギー」に近づけていった。
- ・適宜生徒にから発表をさせ、こまめにフィードバックを試みた。
- ・これまで4回、上級生の発表を見ているため、手法や手順そのものに関する説明は最小限にとどまったが、実際やってみた時の難しさは昨年同様であり、やり直したりする姿も多くみられた。

【講評】

シナリオ・プランニングは、本校SGH構想の中核である。進学校として、単なる体験学習の拡充だけで終わらせないために、生徒の学力向上にも寄与するプログラムとして考案し、その運用によって生徒の論理的思考力の育成に努めた。この過程において思考といえばシナリオを作成する能力というようにとらえられがちなのかもしれないが、実際は何かを言うためにどのような資料を用意するのかという段階から作業は始まっている。都合のいいものだけでなくバランスよく資料を集まる能力はもう少し時間をかけて育成する必要があるだろう。

生徒の成長を伺いながら、必要に応じて手をさしのべる、という形で、教員側も同時に教材開発をしながら一年間指導をしてきた。臨機応変に対応してきたと言える面もあるかとは思いますが、先に与えられていたら、という情報も多い。SPはそもそもビジネスの手法であり、非常に難解である。より簡

素化・明瞭化をはかると同時に、次年度以降の生徒に対して、少しでも体系化して教える方法を考え、より質の高いシナリオ・プランニングが出来るように指導していくことが課題である。とはいえ、一年でSPを卒業制作の骨組み作りにまで高めるのは困難であることも痛感した。高校1年次より指導を開始するための、全体的な枠組みの検証が必要であると言える。

生徒の苦手とする点として顕在化してきたのは、情報収集の仕方についてであった。ドライビングフォースを列挙する段階での漏れ、IUマトリクス適用時のインパクトの大小や不確実性の大小に関する裏付け情報の不足、少子化やテクノロジーの進歩の程度等のトレンド動向についての知識不足は、致命的にシナリオの論理的整合性を損ないかねない。

全般として、自分たちの意見を述べる際に、自分たちのことだけを語ってしまっているのが根本的な問題点であると考えている。

1つのことを論じるに当たっては、自分たちの主張を述べるだけでなく、予測される反論に対する備えが必要である。現状では、この反証の部分がまった手薄になっており、質疑が出てきた際などにまったく反応できないという事態に陥っている。周辺に位置するような資料を用意しておくことの重要性をもっと強調しておく必要があったと思われる。

並行して行っていたSTEPゼミとの連携は、満足いくものには出来なかった。それぞれの分野の視座を養った者が集まってSPを行うという予定であったが、実際は簡単な班内部での役割分担の基準といった程度のものにしかならず、専門的な見地からの意見を述べるという域には達するべくもなかった。時間的な制約がある中で少し多くのことをこなすすぎている感があり、内容の選別は必要になっていると思う。

総じて、一年間指導してきた上での一番の感想としては、生徒達は努力をしていたということである。ただ、日常の答えを求める勉強に慣れているが為に消極的であったり、別の可能性が十分に想像できなかったりということも起こっている。生徒各自の知識や情報収集力にも大きな差があり、全体としての質を保つ方法に工夫が必要になってきているだろう。



③ 2年 Global English (グローバル・イングリッシュ)

【Required Academic skills】

- Effective research skills (E.g. identifying valid resource material)
- Effective reading in relation to sourcing research content (E.g. skimming, scanning, academic article approach)
- Effective presentation skills
- Effective thinking skills
- Effective questioning skills
- Effective discussion skills
- Teamwork

**【Course Mission Statement for the 1st term】**

In this course, students will learn how to introduce various aspects of Japanese culture in an engaging way to an audience abroad, and by doing so contribute to a meaningful cultural exchange. In order to do so, the students have to gain the flexibility to switch perspectives; they will practice to shift between their own Japanese perspective and the perspective of their foreign audience, which is not familiar with Japanese culture. In the process, students will also practice analytical thinking skills that will help them design effective presentations.

【Class Format】

The classes are broken up into smaller groups. Where necessary, they assign roles to ensure smooth, efficient group work. A scaffolded approach is used to assist students in progressing from their actual skill level to the skill level required to give an effective English presentation. Guiding questions used in this process will follow basic strategies for English academic essay writing in order to aid the students in acquiring the ability to approach problems in a systematic and logical way. In addition, wherever possible, teacher input and feedback will be in English in order to encourage the students to shift from Japanese language-based problem solving to thinking and talking about the topics in English, to enable them to give a practice presentation in front of the whole class in English.

【Syllabus】

- Class 1 — Students discuss what aspects of Japanese culture should be introduced during their excursion to Thailand. They reflect on the unique points of Japanese culture by thinking about what it is that makes Japanese culture distinctively Japanese. In order to create an engaging and informative presentation, ideally, the topic should be as interesting to the presenter as to the audience.
- Class 2 — From the list of topics suggested by the students, 7 are chosen and assigned to groups. These groups then discuss the topics with the focus on how to present it in a way that is engaging for the audience. Here, the students practice switching between their own Japanese perspective and that of the Thai audience, which is not familiar with the Japanese culture.

Class 3 — Students work on improving their presentation structure by considering guiding questions that focus on the message that they want to convey, as well as on what means to use in order to deliver it effectively.

Class 4 — Students practice their finished English presentations in front of the whole class and receive final feedback from teachers and other students.

【Teachers' Comments】

Students were systematically encouraged to reflect on and deepen their understanding of Japanese culture in order to identify representative aspects that can serve as a good introduction of Japanese culture aimed at a foreign audience. As expected, this did not pose too great a challenge since the students could draw on their own interests and preexisting knowledge.

The next step for the students was to structure the introduction of the identified aspects in a persuasive and engaging manner while keeping in mind what they wanted the audience to take away from the presentations. To do so, students had to decide on the message they wanted to convey and on examples and reasons to support it in a convincing way.

The final steps were to prepare aides such as videos, audio files and power points, to write up the presentations in English, and finally, to practice in front of the whole class.

【Course Mission Statement for the 2nd and 3rd term】

Many of the problems humanity is facing today can only be solved by making concerted efforts. In order to be able to bring about the necessary changes, leadership skills are indispensable. Therefore, students will be encouraged to have a closer look at various leadership styles, their unique features, as well as advantages and drawbacks inherent to each approach.

【Syllabus】

They first identify a person they consider a great leader. In a scaffolded follow-up exercise, they then write a short introduction that follows the classical essay structure.

After the introductory part, students view an English presentation about basic leadership styles, which functions as a primer for the following group work, where they have to analyze the styles introduced in more depth.

This module on leadership styles concludes with the students identifying various approaches to leadership that they encounter in their daily lives.

【Students' Comments】

I learned how to make a presentation that interests Thai students. This got me to know the differences between Japan and Thailand. I also learned about Japanese culture and features. While making the presentation I made a lot of mistakes. I felt I have to memorize English vocabulary and expressions.”



3. 三年生

卒業論文制作

【意義・ねらい】

高校三年間のグローバルコースの活動の集大成として、これまで行ったシナリオ・プランニング(SP)を卒業作品集としてまとめている。現高校三年生は、グローバルコース一期生として、全てが初の試みである中、非常に頑張って活動をしてきた。しかし、常に次のイベントに追われるような状況であったこともあり、ポスターやパワーポイントは作成しても、研究成果を文章化するという行為がなかなか出来ていなかった。成果を形として残し、彼らが今後の人生の中で振り返る際の依り代にしたいというのが最大の狙いである。また、二期生以降の後輩達が活動をする際の、一つの到達目標として提示することができることも考えた。

現高校三年生にもたらされる効果として期待したのは、文章化作業を通じて、より考えが整理され、論が緻密になることである。また、本論と注とを分けて書くことで、エビデンスに対する意識が強まることも期待した。

【制作の流れ】

具体的な制作の手順は以下の通りである。

① 国際シンポジウムでの発表を受けての反省点の洗い出し

基本的に、高校二年の秋に開催された国際シンポジウムにおいて、ポスター若しくは舞台上のパワーポイントで発表したSPの内容をブラッシュアップしたものを卒業作品とする。しかし、シンポジウムの時点で納得の出来ていない班や、致命的な論の瑕疵が見つかった班などもあり、材料を活かしながら再度一からSPを練り直すという班がほとんどであった。

② 「卒業作品集」の構成の説明。

右にあげるような形で卒業作品集の構成を説明した。SPはそもそもグループ作業で行うものであるため個人作品とのバランスに配慮した。また、一期生で先例がないということもあり、サンプル論文を作成して公開した。

③ 班内共通部分の執筆

各班のトピックについて、中心となる議論は共通部分とした。それまでに議論を重ねてきたこともあり、話し合いながら書き進めるというよりも、担当を分配して執筆するという班が多かった。

④ 個別論述部分の執筆

概要ができあがった後は、個人が班のトピックに絡めて問題提起を行い、自由に論じることとした。ただし、作品集の構成の都合上、班員(10名前後)のうち、必ず4名は、各象限の詳細を自論のテーマに据えることを義務づけた。

⑤ 全作品の集約

〆切を設けて、全班の共通部分と、全員の個別論述部分を集め、仮組みを行った。

⑥ 英語によるサマリーの執筆

各班の共通部分を、各班の英語係が、また、各自の個別論述部分については、各人が、要約して英語のサマリーを執筆した。

グローバルコース 「卒業論文（仮）」の構成

【はじめに】 A

SPとは（全体共通部分。ここについては教員側で作成する。）

【序論】（班内共通部分） A4 (40×40) 2枚程度 B

- ・トピックの紹介
- ・そのトピックを選んだ理由
- ・2軸に挙げたDFの紹介
- ・4象限の概要説明
- ・SPマトリクス模式図

【本論】

第一章（班内共通部分） A4 (40×40) 1枚程度 C

- ・トレンドの動向

第二章（班内共通部分） A4 (40×40) 1-2枚程度 D

- ・X軸選定の理由（インパクトが大きい理由および不確実性が大きい理由）
- ・Y軸選定の理由（インパクトが大きい理由および不確実性が大きい理由）

第三章（個別論述部分） A4 (40×40) 1-2枚程度 E

「1～4象限の詳細なシナリオはどうなるか」というのを基本的な問題提起の型とする。
SPを進める過程で生じた疑問を問題提起とすることも可とするので、その場合、担当教員に確認すること。

【結論】（個別論述部分） F

「以上により、○○で△△な場合の××は□□のようなものになると考えられる。」

本論第三章が具体的なシナリオの形で述べられているのに対して、それを一般化した結論をここでまとめる。

【注及び解説1】（班内共通部分） A4 (40×40) 2枚以上 G

【注及び解説2】（個別論述部分） A4 (40×40) 2枚以上 H

シナリオ自体はどうしても飛躍的な内容で小説的なものになる。それを論理的なものとして提示するために、全ての論理展開に、その根拠となる情報を記載すること。

【添付資料1】（班内共通部分） 必要に応じて I

【添付資料2】（個別論述部分） 必要に応じて J

必要と思われるものを挙げる。網羅的に思考したことを示すためにも、IUマトリクス図は掲載すること。

※個人の卒論としては以上の形式。卒業論文集作成の際には、
A B1C1D1G1H1 E1F1H1J1 E2F2H2J2 … B2C2D2G2I2 E10F10H10I10 …… E78F78H78J78
という構成になる。



【講評】

- ・初めて尽くしの試みの中で、なんとか形になったというだけでも、生徒の頑張りは賞賛に値すると思われる。
- ・これまで班ごとに行ってきた活動から、個人作業にシフトしたことにより、それぞれの生徒の取り組みの姿勢や、トピックやSPそのものに対する理解の差が如実に顕れた。全員がより積極的に活動に参加できるように工夫をしていく必要がある。
- ・エビデンスの重要性に気づくことで、今後の学問との関わり方を意識させることが出来たように思う。
- ・実際に作成させてみると、SPが論理的な展開のみが求められるものではなく、「論文」というよりも「作品」というのにふさわしいものだということが明らかになった。
- ・一期生ということもあり、各論に至るまで、比較的堅い議論が多かった。二期生以降には、より幅の広い、ユニークな作品を期待したい。

4. 未来を考える 国際シンポジウム

「未来を考える国際シンポジウム」(11月11日(土)実施)のまとめ・成果と今後。

【目的と方法】

海外から高校生を招待してともに活動を行うことにより、グローバルリーダーとして必要な様々な能力の向上と異文化に対する理解を深める。また、国内の他校生徒との交流により互いに刺激を受けることを目的とする。

招待した海外の高校の生徒とともに、「シナリオ・プランニング」や「パネルディスカッション」を試み、積極的な議論の場とする。

また、国内の高校生にも参加いただき、本校の発表やパネルディスカッションを聞いていただくだけでなく、各校の取り組みを「ポスター」によって発表し、高校生同士の交流の場を設ける。

◎参加者

- 1) 本校グローバルコース生徒 (1・2年生)
- 2) 本校、中学3年生
- 3) 本校生徒の保護者
- 4) 海外招待校生徒・教員

St. Joseph's Institution(The Republic of Singapore)

Colegio de San Juan de Letran (Republic of the Philippines)

Choate Rosemary Hall (United States of America)

Le Hong Phong High School(Vietnam)

Marie Curie High School(Vienam)

- 5) 国内他校生徒・教員

高槻中学校・高等学校、大阪府立泉北高等学校

- 6) 運営指導員、提携先関係者



【日程表】

	プログラム	場所	本校生以外の参加	
11:00	オープニング	第一体育館		
11:05	司会挨拶			
11:10	STEPゼミとは？			
11:13	高1プレゼンテーション①			
11:19	高1プレゼンテーション②			
11:25	シリオ・プランニングとは？			
11:30	高2プレゼンテーション①			海外招待生徒
11:41	高2プレゼンテーション②			
11:52	高2プレゼンテーション③			
12:03	パネルディスカッション準備			
12:05	パネルディスカッション			
12:30	講評			
12:45	午前の部終了			
	昼食			カフェテリア等
13:45	ポスター発表開始	第二体育館	国内他校生徒 運営指導委員等 アドバイザー (本校卒業生等)	
15:15	ポスター発表終了			
	親睦会	カフェテリア	海外招待生徒 国内他校生徒	
16:30	終了、解散			



◇プレゼンテーション

1) 1年生生徒による

STEP(Soceital, Technological, Economic, Political)ゼミのうち、前期で行った E(Economic), P(Political)の代表による発表。

E(Economic)は、生徒の定めたテーマに関する株式投資のポートフォリオの発表を行う。

P(Political)は、「国連弁当」のメニューを提案するという形で、各国の立場に立って、主張。なお、今回の発表のテーマ・国名は次のようになっている。

① Economic 「Fight against Ebola! -efforts by companies in Japan-」

② Political 「Change the world for the better!! -Saudi Arabia-」

また、残りの班については、ポスター発表の形式で午後から発表が行われた。

2) 2年生生徒による

4月以来、シナリオ・プランニング（SP）に取り組んできたが、今回は以下の3つのトピックによる3班の発表が、代表して行われた。

- ①「SP×SP OSAKA STATION CITY in 20 years」
- ②「Garbage Power Generation」
- ③「The Future of Air Travel」

3班目は海外生徒とのSPという新しい試みになっている。また、残りの班は、ポスターの形式で午後から発表が行われた。



【パネルディスカッション】

今回のパネルディスカッションのテーマを

“How can high school students acquire global leadership? “

とした。

グローバル化が加速度的に進む現代にあって、これからの時代を生きていくためにはグローバルリーダーシップが求められるようになっていくことは必定である。求められる人材になるために高校生が今できることは何か。そして、学校はどのようなプログラムを実現すべきなのか。海外の生徒を交えて話すことで目指すべき方向性を明らかにしたいと考えた。



【ポスター発表】

生徒同士の交流・意見交換の機会が案外少ないことに鑑み、積極的にこのような場を作るとともに、様々なアドバイザーからの指導・助言いただき、今後のSGH等の活動に資することが目的である。

参加者とその内容は以下の通りである。（なお、①，②，……，⑳はポスターの番号）

◎国内他校のポスター等による発表

学校名	グループ数 (生徒数)	内容・テーマ
大阪府立泉北高等学校	2(2)	①今の日本に最も適したエネルギーとは ②MSC と持続可能な漁業
高槻高等学校	4(9)	③Crisis of antibiotics ④THE ECONOMIC LOSS ~Take time to deliberate about epidemic of Ebola~ ⑤BEFORE IT'S TOO LATE ~Global warming and infectious ⑥Prevention from epidemic diseases



◎本校のポスター発表

		題名	
1 年 生	E	⑦	ねとねとマンとカネ
		⑧	防災
		⑨	宇宙とその仲間たち
		⑩	東京パラリンピック
		⑪	観光立国化計画！！～in 大和～
		⑫	地震防災
		⑬	金に恋する祭りのごたる

		題名	
P	⑭	アフリカが誇るナイジェリア弁当	
	⑮	国弁大全	
	⑯	マレーシア弁当～ココナッツと共にあらんことを～	
	⑰	お食事処ドイツ	
	⑱	メキシコ弁当～メキシコの歴史を添えて～	
	⑲	フェアトレードで世界を繋ぐ、ブラジル弁当	
	⑳	国連弁当の『スベテ』	

			トピック	
2 年 生	⑳	SP4	Smart home 20 years from now	
	㉑	SP5	Saving energy in cities	
	㉒	SP6	Future structure -a world looked from infrastructure in twenty years-	
	㉓	SP7	Electricity generating in Japan 20 years from now	
	㉔	SP8	What will happen to ZEB?	
	㉕	SP9	Cars in Near Future	
	㉖	SP10	The Main Method of Generating Electricity	

【成果と今後の取り組み】

文化の異なる者同士の議論がうまくかみ合うのか、英語力が十分発揮できるのかと不安は大きいですが、チャレンジする機会を設けることに意義がある。また、積極的な活動の結果、様々な課題を発見することが、次の場面における大きな成果につながるものであると考え始まったシンポジウムも2回目を迎えた。昨年にはなかった企画として留学生徒とのシナリオ・プランニングを企画した。短い準備期間ではあったが、海外生徒の論理構築や議論の進め方の面でかなり刺激を得たものと思われる。



また、SGH 活動の成果発表だけでなく、グローバルな生徒同士の交流の機会を設けることにより、

今後はより積極的に生徒間のコミュニケーションへの機とすることができる。このことが、SGH の目標達成への1つの基盤作りとなることが期待される。

日本語で考えたものを英語にして伝達するのではなく、日本語的な視座を持ったまま英語での思考も身につけることで多様な切り口を持つことができるはずである。



5. 3月 国内外のフィールドワーク

昨年3月に実施されたフィールドワークのまとめ・研究課題と交流内容

【まとめ】

No.	行先	日程	内容
1	JAXA・筑波大 コース	3/20 (月)	新大阪出発→東京着 アクセンチュア訪問（東京）→筑波へ移動（バス） 講演（本校卒業生の弁護士による）
		～ 3/23 (木)	筑波大学訪問（終日） 宇宙航空研究開発機構(JAXA)訪問（終日） 東京へ移動（バス） 社会見学 東京証券取引所訪問 東京出発→新大阪着
2	国内理系コ ース（産総 研・東工大）	3/20 (月)	新大阪出発→東京着、筑波へ移動（バス） 筑波大学訪問 講演・ワークショップ 講演（本校卒業生の弁護士による）
		～ 3/23 (木)	東京工業大学訪問（終日） 講演・研究施設の見学・ディスカッション 産業技術総合研究所(AIST)訪問（終日） 講演・作成実習・ワークショップ 東京へ移動（バス）、社会見学 東京証券取引所訪問 東京出発→新大阪着
3	マレーシア (ジョホールバル) シンガポール	3/17 (金)	チャンギ国際空港着→マレーシア（ジョホールバル）へ陸路にて移動 マレーシア工科大学 大学生・大学院生と協働でのワークショップ活動 テーマ別のプレゼン・グループ別ディスカッション
		～ 3/22 (水)	マレーシア工科大学 レクチャー、ディスカッションのまとめとプレゼン マレーの村体験 シンガポールへ陸路にて移動→ 企業訪問・レクチャー（シンガポールの歴史と発展）・見学等 現地大学生とグループ別のフィールドワーク 理化学研究所訪問・講演 St. Joseph's Institution（シンガポール） 高校生と協働でのワークショップ活動 テーマ別のプレゼンテーション グループ別ディスカッション 現地法人訪問・見学等
			チャンギ国際空港発→



No.	行先	日程	内容
4	フィリピン (マニラ)	3/17 (金) ~ 3/22 (水)	→ マニラ国際空港着
			Colegio de San Juan de Letran 高校生と協働でのワークショップ活動 キャンパスツアー、レクチャー聴講 グループ別ディスカッション (テーマごとにグループは変わる) ディスカッションの内容についてのプレゼンテーション
			Letran の学生とグループ別フィールドワーク (マニラ市内) マンゴーツアーでのプレゼンテーション、市内観光 スモーキーマウンテン見学、GK財団訪問
			マニラ国際空港発→
5	ベトナム (ホーチミン)	3/14 (水) ~ 3/19 (月)	関空発→ホーチミン国際空港着
			Le Hong Phong High School 訪問 (終日) 現地企業訪問 (終日)
			Marie Curie High School 訪問 (終日) Marie Curie の学生とグループ別 フィールドワーク (ホーチミン市内)
			A A B ベトナム訪問 (終日) 現地企業訪問 社会見学
			ホーチミン空港発→関空着
			

【研究課題・交流内容】

行先	連携先	内容
1	国内文系チーム (JAXA・筑波大)	アクセンチュア サーキュラーエコノミーを使った新しいビジネス創出。 アクセンチュアの持つ最先端のビジネスに触れながら、コミュニケーション能力、ディスカッション能力、発信能力、論理的思考を涵養する。
		筑波大学 人文社会系 タック川崎レスリー研究室 タック川崎レスリー准教授や留学生達と意見交換を行うなかで、自身の意思を伝える技術を向上させる。 前半後半の2部構成、全体を通じて英語での活動。 前半は、ポスター発表とプレゼンテーション発表の違いを学び、後半は、日本の選挙活動における SNS 活用について、どの媒体が最も効果的かディスカッションと発表を行った。
		宇宙航空研究開発機構 (JAXA) 施設見学後、宇宙飛行士運用技術ユニット宇宙医学生物学研究グループ 村井正氏より「有人火星探査と特殊環境での生活」を講義。 火星という特殊環境下における生活を成立させるために必要な、自分・チームの役割とは何かについてディスカッションと発表を行った。
		東京証券取引所 インターネットを利用した会社研究。 7 & i グループについて調査・分析を事前に行い、プレゼン資料を用意。 東証にてプレゼンおよび質疑応答。 専門家の意見を踏まえてディスカッション。

行先	連携先	内容
2 国内理系チーム (産総研・東工大)	筑波大学大学院 人間総合科学研究科 体育学専攻スポーツ バイオメカニクス研究室	三次元動作分析装置を用いた走りの動きの計測および比較 日頃からスポーツをしている人とそうでない人の走り方を計測し、動きの特徴を分析・比較を行う。その結果をもとにディスカッション。
	東京工業大学大学院 生命工学研究科 生体システム専攻	オートファジーについての講演および実験装置の見学 2016年ノーベル生理学・医学賞を受賞した大隅良典先生の研究室を見学
	産業技術総合研究所 つくばセンター	午前午後の2班に分かれて、交代で2つのプログラムを実施 生徒発表と、研究者を交えての改善のためのディスカッション 「計量標準と国際標準」「エネルギー材料のナノ観察」
	東京証券取引所	インターネットを利用した会社研究 医療機器メーカーのシスメックスについて調査・分析を事前に行い、プレゼン資料を用意しておく。東証にてプレゼンおよび質疑応答。専門家の意見を踏まえてディスカッション。

3 マレーシア・シンガポール	Universiti Teknologi Malaysia	<p>Presentations by UTM</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Tourism in Malaysia 2. Traditional and modern culture of Malaysia 3. City planning in Malaysia 4. Environmental problems in Malaysia <p>Presentation by SN students</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ School introduction <ol style="list-style-type: none"> 1. Tourism in Japan 2. Traditional and modern culture of Japan 3. City planning in Japan 4. Environmental problems in Japan <p>Discussion in 4 groups based on the following topics</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. How to attract tourists more to Malaysia and Japan? 2. How to adjust our own traditional culture to modern society? 3. What we need for a better living environment? 4. How to reduce CO2 or air pollution? <p>Power Point Summary Presentation by all groups.</p>
	St. Joseph's Institution	<p>School introduction by SN student</p> <p>Presentation about</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Tourism in Japan 2. Traditional and modern culture of Japan 3. City planning in Japan 4. Environmental problems in Japan by SN students <p>Discussion in 4 groups based on the following topics</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. How to attract tourists more to Singapore and Japan 2. How to adjust our own traditional culture to modern society 3. What we need for a better living environment? 4. How to reduce CO2 or air pollution <p>Summary Presentation</p>



行先	連携先	内容
4	フィリピン (マニラ)	Colegio de San Juan de Letran 1. Cultural Exchanges Phillipine Dance Tea Ceremony/Kendama/Calligraphy/Origami/J-Pop 2. Discussion and presentation “Domestic Problems of Each Country”
		3. Lecture by a teacher from Letran, discussion and presentation “Power of Speech” After listening to the lecture, the students tried impromptu talk, composed Haiku in groups and shared in the class. 4. Lecture by a teacher from Seifu Nankai, discussion and presentation “What is Happiness?” 5. Presentation “ How to convey the appeal of <u>the Philippines/Japan in Japan/the Philippines?</u> ”
		マンゴー ツアーズ Presentation in Japanese 「フィリピンの魅力をいかにして日本で伝えるか」
	G K財団	活動内容のレクチャー、GK 村の子供達との交流。 GK 村 (バセコ地区) の見学

5	ベトナム (ホーチミン)	Le Hong Phong High School <ul style="list-style-type: none"> • Introduction of LHP & SN • Introduction about Ho Chi Minh City & Osaka Prefecture • Presentations by SN students about the ideas of how to increase the number of tourists from Vietnam to Japan • Scenario Planning for the future public transportation in Ho Chi Minh City, “Transition from Motorbike to Subway” • Presentation by each group
		Marie Curie High School <ul style="list-style-type: none"> • Introduction of LHP & SN • Discussion (Divided into 3 groups) <ol style="list-style-type: none"> 1. The environment of Vietnam 2. The transition of public transportation in Ho Chi Minh City, “From Motorbike to Subway” 3. What should we do when the number of elderly people is increasing? • Presentation by each group
		AAB Vietnam <ul style="list-style-type: none"> • Introduction of AAB by the president • Lecture by a staff member from AAB “How to Create an Event Plan” • Presentation Making a plan to let Vietnamese people know attractive points of Japan and increase the number of Vietnamese tourists to Japan. 